

ひとくち様

脚本 CineOps

第一稿

(これはサンプル脚本です)

登場人物

笠原ヒロキ (29) ……主人公。フリー編集者
笠原ナナミ (23) ……ヒロキの妹／大学院生
祖母・笠原シノ (故人・80) ……冒頭に死亡
親族・笠原正志 (52) ……本家筋のいとこおじ／口数少ない
親族・笠原トメ (78) ……シノの妹／神経質
村の老人・大迫 (70) ……村の元区長／何かを知っている
村長・内田 (55) ……表向きは紳士、裏で儀式を仕切る
神主・榊 (60) ……八尋神社の宮司
女子高生・真帆 (17) ……隣家の娘／唯一の若者
真帆の母・雅子 (45) ……
仕出屋の女・澄江 (50) ……毎日御膳を届ける
民俗学者・久住 (45) ……東京からの協力者／電話のみ
幼いナナミ (8) ……回想
若きシノ (30代) ……回想
ひとくち様 ……「気配」「影」「音」として顕現。直接描写は最小限

場所 (ロケ地)

八尋村 (やひろむら／架空の山間の集落)
笠原家・古民家 (母屋／奥座敷／土間／裏手／蔵)
祠 (裏山の小さな石祠＝「ひとくち様」)
八尋神社 (本殿／境内／社務所)
村の集会所

仕出屋「澄屋」

ヒロキの東京マンション（都内）

駅／車中／山道／墓地／井戸

○1 八尋村・遠景（未明）

山深い集落。霧。

等高線に沿った段々畑。瓦屋根の家々が三十軒ほど。

集落のはずれ、一軒だけ明かりが消えている屋敷。

笠原家。

真っ黒な鴉が一羽、屋根の上にとまって鳴く。

○2 笠原家・奥座敷（未明）

行灯のような薄い明かり。

老婆・笠原シノ（80）、布団に横たわっている。

枯れ枝のような手で、何かを握っている。

紙片。毛筆で書かれた和紙。

「ひとくちさま 今日お願いします」

シノの口が、ゆっくり動く。

シノ「……ごめん……な……ヒロキ……ナナミ……」

息、途絶える。

紙片が、畳の上に落ちる。

どこかで、襖の向こうで、

……ずず、と、何かがすすする音。

○3 ヒロキのマンション・寝室（朝）

東京、都内の古いLDK。

ヒロキ（29）PC前で作業しながら寝落ちしている。

スマホが鳴る。画面に「澄屋 澄江さん」。

ヒロキ「（寝ぼけて）……はい」

澄江の声（電話）「ヒロキさん……お婆ちゃん、今朝がた……」

ヒロキ、目を開ける。

○4 ヒロキのマンション・リビング（朝）

ヒロキ、電話を切る。

しばし呆然。

ナナミ（23）、大学のバッグを肩に入ってくる。

ヒロキの顔を見て立ち止まる。

ナナミ「どした？」

ヒロキ「……ばあちゃん、亡くなったって」

ナナミ、バッグを落とす。

○5 東京駅・新幹線ホーム（昼）

喪服のヒロキとナナミ、キャリーケースを引いて歩く。

ナナミ、目が赤い。

ヒロキ、スマホで時刻表を確認。

ヒロキ「これまで一時間、そこから在来線二時間、バスで四十分」

ナナミ「……遠いね」

ヒロキ「ばあちゃん、こんな遠いところに一人で……」

○6 車窓(夕)

段々畑と山が流れていく。

ナナミ、窓に額をつけて外を見ている。

ナナミ「子供の頃、一回だけ来たよね」

ヒロキ「ああ。お前、小二のとき」

ナナミ「……何か、怖かった記憶がある」

ヒロキ「田舎なんて、そんなもんやろ」

○7 八尋村・バス停(夕)

小さなバス停。周りは畑と杉林。

ヒロキとナナミが降り立つ。

バスは去っていく。

誰もいない。

ナナミ「……お兄ちゃん、誰か来るって」

ヒロキ「正志おじさんが迎えに来るって言うてた」

山の方から、軽トラのエンジン音。

○8 軽トラ車内（夕）

運転席に笠原正志（52）。無愛想。

助手席にヒロキ、後ろの荷台にナナミのキャリーケース。ナナミは後部シート。

正志「久しぶりやな」

ヒロキ「ご無沙汰してます。今回は、色々お世話に」

正志「……」

沈黙。

正志「ばあさん、苦しまんかったよ」

ヒロキ「それは、なによりで」

正志「寝とるみたいにな、死んどった」

正志、バックミラーでナナミを見る。

ナナミ、視線を感じて目をそらす。

○9 笠原家・外観（夕）

瓦屋根の古民家。

長い石段を上がったところに位置する。

玄関先に白い提灯が二つ。忌中。

ヒロキとナナミ、石段を上がる。

ナナミ、上り切ったところで、ふと裏山の方を見る。

山の斜面、木立の奥に、小さな祠のようなものが見える。

ナナミ「……お兄ちゃん、あれ」

ヒロキ「え？」

振り返ると、もう見えない。霧か、木の影か。

○10 笠原家・奥座敷（夜）

布団に横たわるシノ。

白布で顔を覆われている。

周囲に親族数名。

トメ（78／シノの妹）、大迫（70）、近所の老人たち三、四人。

ヒロキとナナミ、手を合わせる。

トメ「よう、来てくれたなあ」

ヒロキ「お世話になります」

トメ「……で、これから、どうするん？」

ヒロキ「え？」

トメ「家のこと。仏壇のこと」

ヒロキ「明日、葬儀終わったら、相談しようかと」

トメ、ちらりと大迫を見る。

大迫、小さく首を振る。

○11 笠原家・土間（夜）

古い土間。昔ながらのかまど。

澄江（50／仕出屋の女将）、重箱を並べている。

澄江「今晚のぶんと、あした朝ごはんぶんです」

ヒロキ「すみません、ありがとうございます」

澄江「あと、これ」

澄江、別の小さな弁当箱をヒロキに渡す。
桐の箱。

澄江「裏の、ひとくち様に、お供えしてください」

ヒロキ「……ひとくち様？」

澄江「シノさんが、毎日やってはったことです」

澄江、言葉を濁して帰っていく。

ナナミ、弁当箱をのぞき込む。

中には一口分の白飯、一口分の煮物、一口分の魚。

ナナミ「……なんか、可愛いね」

ヒロキ、不思議そうに箱を見ている。

○12 笠原家・裏手（夜）

懐中電灯の光。ヒロキとナナミ、細い石段を登る。
裏山の杉林。

小さな石の祠。

軒下に古い木札。文字はかすれて読めない。

ヒロキ「これか」

ヒロキ、弁当箱の蓋を開け、祠の前の板にそつと置く。

風が、ざあ、と杉の梢を揺らす。

祠の奥から、

……ずず、と、すすする音。

ヒロキとナナミ、顔を見合わせる。

ヒロキ「……気のせいや」

早足で石段を降りる。

○13 笠原家・奥座敷（夜）

ヒロキとナナミ、客布団を敷く。

シノの遺体は隣の間に移されている。

ナナミ「お兄ちゃん、一緒に部屋で寝よ」

ヒロキ「なんや、子供みたいに」

ナナミ「だって、気味悪いもん」

ヒロキ、苦笑して布団を並べて敷く。

襖の向こうから、

……ぴちゃ、ぴちゃ。

雨でも降ってきたか。

ヒロキ、雨戸の隙間から外を見る。晴れている。月が出ている。

○14 笠原家・奥座敷（深夜）

ナナミ、眠れない。

天井の木目を見つめている。

廊下から、ぎし、ぎし、と足音。

ナナミ、息を止める。

足音、奥座敷の襖の前で止まる。

襖が、数センチ、すうっと開く。

真っ暗な廊下。誰もいない。

ナナミ、小さく声を上げる。

ナナミ「お兄ちゃん……」

ヒロキ「（寝ぼけて）なんや」

ナナミ「襖、開いた」

ヒロキ「風やろ」

ナナミ、そうっと身を起こし、襖を閉めようとする。

閉めかけた襖の隙間に、

細い、しろい、指のようなものが、ちらり。

ナナミ、息を吞んで、一気に襖を閉める。

○15 笠原家・朝食（朝）

土間のちゃぶ台。

ヒロキとナナミ、朝食を食べている。

澄江が持ってきた重箱の中身。

ナナミ、目の下にクマ。

ヒロキ「お前、夢でも見たんや」

ナナミ「本当に、指、見たもん」

ヒロキ「（食べながら）ほんなら、葬式終わったらすぐ帰ろう」

土間の戸が、こんこん、と叩かれる。

大迫（TO）が立っている。

大迫「おはようございます」

ヒロキ「どうも。お早いですね」

大迫「ちょっと、裏、見せてもろうてよろしいか」

ヒロキ「……裏？」

大迫「祠です」

○16 笠原家・裏手・祠（朝）

朝の光。

昨夜置いた弁当箱。

蓋が、わずかにずれている。

ヒロキ、蓋を開ける。

中の白飯が、一口分だけ、すっと削げたように、えぐり取られている。

ヒロキ「……鳥か、なんかや」

大迫「そうですな」

大迫、目をそらしながら言う。

大迫「で、今日のぶんも、供えなあかんです」

ヒロキ「今日も？」

大迫「毎日。欠かさず。

シノさんは、五十年、やってはった」

ヒロキ「……五十年？」

大迫「結婚してこの家に入ってから、ずっとです」

○17 八尋神社・境内（昼）

葬儀後。村人が三々五々、帰っていく。

ヒロキとナナミ、宮司の榊（90）に挨拶している。

榊「ご愁傷さまでした」

ヒロキ「あの、お聞きしてよいですか」

榊「はい」

ヒロキ「ひとくち様、というのは、なんなんでしょう」

榎の表情が、わずかに曇る。

榎「……昔話です。土地の」

ヒロキ「どんな」

榎「(言葉を選んで) この村には、昔、大きな飢饉があつて。

その時、村の者たちが、生き延びるために、

『一口分だけ』差し出すことで、助かった、という話です」

ヒロキ「誰に、差し出したんですか」

榎「……それは、もう、忘れられた神様です」

榎、会釈して社務所に戻っていく。

ナナミ、ヒロキの腕を引く。

ナナミ「お兄ちゃん、早く帰ろ」

○18 集会所・広間(夕)

四十九日には早い、村の慣例で「お別れの膳」がある。

大迫、トメ、正志、澄江、村長・内田(55)など。

内田「遠いところ、来てくれてありがとう」

ヒロキ「こちらこそ、お世話に」

内田「で、あの家、どうされますか」

ヒロキ「まだ、ちょっと決めかねてて」

内田「（笑顔で）そうですか。まあ、ゆっくり決めて」

内田、ヒロキのコップに酒を注ぐ。

内田「（小声で）ただ、一つだけ、お願いがあります」

ヒロキ「はい？」

内田「裏の祠には、毎日、お供えを。

家を畳むまでの間、で構わんですから」

ヒロキ「……それは、どういう」

内田「（遮るように）澄屋が届けます。

あなた方は、供えるだけで」

ヒロキ、頷くしかない。

○19 笠原家・奥座敷（夜）

ヒロキ、シノの遺品整理を始めている。

桐箆笥。引き出しを開ける。

和綴じの日記帳が出てくる。

表紙に「笠原シノ 日々の記」。

ヒロキ、めくる。

昭和四十五年から始まっている。

几帳面な字。

毎日のページの最後に、必ず一行。

「今日も、ひとくち様にお供え」

ヒロキ、ぱらぱらとめくる。

昭和五十八年のページ。

「忘れた。正男、ひとくち」

ヒロキ、手が止まる。

○20 ヒロキの電話（夜）

奥座敷。

ヒロキ、スマホで電話している。

民俗学者の久住（きずみ）。

久住の声「笠原さん、興味深いですよ、それ」

ヒロキ「昭和五十八年の記録に、『正男、ひとくち』って書いてあって」

久住の声「正男さん、というのは？」

ヒロキ「うちの父の兄です。子供の頃に、事故で、指を一本欠いたと聞いてます」

久住の声が、電話の向こうで、少し黙る。

久住の声「……笠原さん、その村、

ちよっと調べさせてください。

明日中に折り返します」

ヒロキ「ありがとうございます」

久住の声「それまで、お供えは、欠かさないで」

通話終了。

○21 笠原家・裏手・祠（夜）

ヒロキ、新しい御膳を供える。
澄屋が夕方届けた分。

祠の奥、闇の中から、

……ずず、と、すすする音。

前よりも、はつきり聞こえる。

ヒロキ、ぞっとして石段を駆け降りる。

○22 笠原家・奥座敷（深夜）

ナナミ、ヒロキの布団に入り込んで眠っている。

ヒロキ、天井を見つめている。

ぎし、ぎし、と廊下を歩く音。

前日と同じ。

今度は、襖の前では止まらず、通り過ぎる。

家の、奥の方へ。

ヒロキ、そっと身を起こす。

遠く、奥の間から、

……ぺち、ぺち、と、何かを舐める音。

○23 回想・笠原家・奥座敷（昭和）

若きシノ（30代）、幼い子（父・正男・5歳、もう一人の子・ヒロキの父・博）を寝かしつけている。
襖の向こう、聞。

若シノ「（ひとり言）……今日も……あの子ら、守ってくれはった……」

若シノ、弁当箱を持って、裏へ。

○24 笠原家・井戸端（朝）

古い手押しポンプの井戸。

ナナミ、顔を洗っている。

井戸端に、小さな女の子の姿。

真帆（17／制服）ではなく、もっと幼い、昔風の着物の子。

ナナミ、目をこする。

いない。

代わりに、真帆（17）が立っている。

真帆「あの……笠原さんの、妹さんですよね」

ナナミ「は、はい」

真帆「隣の、久保田、真帆って言います。

ちよっと、話、できますか」

○25 笠原家・縁側（朝）

ナナミと真帆、縁側に並んで座る。

真帆、制服。登校途中らしい。

真帆「シノおばあちゃん、亡くなったって」

ナナミ「うん」

真帆「私、おばあちゃんに、よくしてもらってたんです」

ナナミ「そうなんだ」

真帆「……だから、言っとこうと思って」

ナナミ「何を？」

真帆「早く、帰ってください。今日じゅうに」

ナナミ、真帆の顔を見る。

ナナミ「どういうこと？」

真帆「（小声で）ひとくち様は、本当にいるんです」

ナナミ「……」

真帆「毎日供えても、『代替わり』のときは、必ず、

その家の誰か一人、

一口、持っていかれるんです」

ナナミ「一口？ 何を？」

真帆「……指。耳。鼻。目。舌」

ナナミ、息を呑む。

真帆「うちの祖父も、左の小指、ないです」

○26 車中・村外れ(昼)

ヒロキの運転で村外れに。

助手席にナナミ。

ナナミ、真帆から聞いた話を伝えている。

ヒロキ「そんな、非科学的な」

ナナミ「お兄ちゃん、帰ろうよ」

ヒロキ「遺品整理、まだ終わってない」

ナナミ「家、専門業者に頼めばいいじゃん」

ヒロキ「(少し苛立って) わかった。明日じゅうに終わらせる」

車、山道を登る。

道端に、倒れた鳥居。

○27 笠原家・蔵(昼)

土蔵。埃まみれ。

ヒロキ、古い行李を開ける。

油紙に包まれた古文書。

墨で書かれた文字。

「八尋村 神祀帳 寛政三年」

ページをめくる。

「ひとくち神 一口 欠かすべからず

怠れば 一家 一口 取られる」

別のページ。人の名前の一覧。

その横に、「左耳」「右小指」「右目」「舌半」など、
生々しい注記。

ヒロキ「(冷や汗)……」

蔵の外で、電話が鳴る。

久住からだ。

○28 蔵の外(昼)

ヒロキ、電話に出る。

久住の声「笠原さん、大変です」

ヒロキ「はい」

久住の声「あの村、江戸期に、『欠損神事』の記録があります。

飢饉で、村全体が『神』と称する存在に、
身体の一部を差し出す契約をした、と」

ヒロキ「それが、ひとくち様」

久住の声「おそらく。で、問題はここからで。

契約は、土地神ではなく、家筋に入ったようです。

笠原家の場合、代替わりのときは、
必ず一人が『ひとくち』差し出すことが、
昭和の記録にまで残っています」

ヒロキ「うちの伯父の指は、それか」

久住の声「代替わりのご当主は、三日以内に、

『身代わりの人形』を祠に供えないと、
家族の誰かが、取られます」

ヒロキ「三日」

久住の声「シノさんが亡くなった日から。

今日で、何日目ですか」

ヒロキ「……三日目や」

電話の向こう、久住、絶句する。

○29 笠原家・奥座敷（夕）

ヒロキ、ナナミに久住の話を伝えている。

ナナミ、顔が青い。

ナナミ「身代わりの人形って、何」

ヒロキ「久住さん曰く、藁人形か、土人形。

この家の蔵か、仏壇の奥にあるはずやって」

二人、仏壇を開ける。

小さな引き出しの奥。

布で包まれた、手のひらサイズの木彫り人形。

ヒロキ「これか」

ナナミ、人形を手取る。

ずしりと重い。

夕焼けが、障子を赤く染めている。

○30 笠原家・裏手・石段（夕）

ヒロキとナナミ、石段を登る。
人形を風呂敷に包んで。

半分ほど登ったところで、ナナミの足が止まる。

ナナミ「お兄ちゃん」

ヒロキ「なんや」

ナナミ「……上、見て」

祠の方。

夕陽を背に、人影。

大迫、トメ、内田、榊、澄江、正志。

村の主だった面々が、祠の前に立っている。

全員、白い装束。

○31 笠原家・裏手・祠前（夕）

ヒロキとナナミ、登り切る。

内田「笠原さん、お待ちしました」

ヒロキ「……これは、何ですか」

内田「代替わりの儀式です」

ヒロキ「身代わり人形を供えに来ました」

榊「（首を振る）それは、百年前までです」

ヒロキ「え？」

榊「昭和に入ってから、人形は、
効かなくなりました」

トメ「ひとくち様は、もう、人形では満足しません」

大迫「実の、一口を、求めておられる」

ヒロキ、人形を握りしめる。

ヒロキ「そんなもん、認めるか」

内田「（穏やかに）笠原さん。

あなたも、妹さんも、この村を、
今晚は、出られません」

ヒロキ、振り返る。

石段の下、他の村人たちが集まっている。

ヒロキ「……」

榊「どちらか、一口。

お決めください」

○32 笠原家・裏手・祠前（夜）

月が昇っている。

松明の火が揺れる。

ヒロキ、ナナミを後ろに庇う。

ヒロキ「俺や。俺の一口、でええ」

ナナミ「お兄ちゃん、だめ」

ヒロキ「お前はまだ、これからやろ」

ヒロキ、前に出る。

榊が、古びた小刀を取り出す。

ヒロキ、左手を三方に置く。

榊「左の、小指で、よろしいですか」

ヒロキ「……はい」

榊、小刀を構える。

ナナミ、叫ぶ。

ナナミ「待って！」

全員、ナナミを見る。

ナナミ「おばあちゃんの、日記」

ナナミ、懷から日記帳を取り出す。

ナナミ「昭和四十一年のページに、こう書いてあります」

ナナミ、震える声で読む。

ナナミ「ひとくち様は、血で満たされた者を望まぬ。

心からの、一口を望む』

榊「……それは」

ナナミ「『代替わりのとき、

前の当主の一口を、土に返せば、
新しい一口は、要らぬ』

村人たち、ざわつく。

○33 笠原家・奥座敷（夜）

駆け込むヒロキとナナミ。

シノの布団（遺体はすでに霊柩車で運ばれ、不在）。

シノの枕元に、小さな木箱。

ナナミ、箱を取る。

箱を開ける。

中に、ひとかけらの「爪」が入っている。
シノ本人の、小さく切り取られた爪。

ナナミ「これが、おばあちゃんの『一口』」

村人たち、奥座敷に入ってくる。

大迫「……それを」

ナナミ「土に返します。祠の前に」

ヒロキ、ナナミの手を握る。

○34 笠原家・裏手・祠前（夜）

ヒロキ、爪のかけらを土に埋める。

ナナミ、手を合わせる。

ナナミ「おばあちゃん、ありがとう」

風が、一度だけ、強く吹く。

松明の火が、大きく揺れて、一瞬消えかける。

祠の奥から、

……ずず、ずず、と、満足げな音。

そして、ぱたり、と静かになる。

○ 3 5 笠原家・縁側（明け方）

東の空が白み始めている。

ヒロキとナナミ、縁側に並んで座っている。

二人とも疲れ切っている。

ヒロキ「……これで、終わりか」

内田（縁側下から）「終わりです。

あなた方の代は、もう、関係ありません」

内田、他の村人と共に、会釈して去っていく。

○ 3 6 笠原家・奥座敷（朝）

ヒロキ、日記の最後のページを開く。

シノの字。

「ヒロキへ。

代替わりの時は、

わたしの一口を、

祠に返しておくれ」

ヒロキ、日記を閉じる。
目頭を押さえる。

○37 八尋村・バス停（昼）

ヒロキとナナミ、キャリーケースを引いて立っている。
バスを待っている。

真帆が、制服姿で、息を切らして走ってくる。

真帆「無事で、よかった」

ナナミ「心配してくれてたんだね」

真帆「お兄ちゃんの、指、無事ですか」

ヒロキ「（苦笑して）無事や」

真帆「家、どうするんですか」

ヒロキ「……しばらく、そのままに。
年に一度、正月に、来るわ。
ひとくち様にお供えしに」

真帆、うなづく。

真帆「おばあちゃん、喜びます」

○38 車窓・下り（昼）

山道をバスが降りていく。
ナナミ、窓の外を見ている。

ふと、背後の山の方、

小さな祠のあたりに、一瞬、
白い着物の、老婆のような影が見える。
手を振っている。

ナナミ、手を振り返す。
だれにも見えないように、小さく。

○39 東京・ヒロキのマンション（夜）

一週間後。

ヒロキ、PCで原稿を書いている。

画面に「民俗学雑誌 特集…土地神と契約」。

ナナミ、キッチンで紅茶を淹れている。

ナナミ「お兄ちゃん、もう書いてるの」

ヒロキ「久住さんに頼まれた」

ナナミ、ヒロキの肩越しに画面を覗く。
ふと、窓のほうを見る。

窓ガラスに、うつすら、
小さな祠のような形の、光の反射。

ナナミ、目をこする。

反射、消えている。

○40 ヒロキのマンション・ベランダ（夜）

ヒロキ、ベランダに出て、煙草を吸う。

東京の夜景。

遠くでサイレン。

ふと、足元を見る。

コンクリートの隙間に、小さな植木鉢。

植木鉢の土の上に、

一口分の、白い飯粒が、

ちよこんと、置かれている。

ヒロキ「……」

ヒロキ、一瞬、凍りつく。

振り返る。

ナナミが、キッチンで、

こちらに背を向けて、

何かをしている。

ナナミ、肩越しに振り返る。

いつも通りの笑顔。

ナナミ「お茶、冷めるよ」

ヒロキ、ぎこちなく笑って、部屋に戻る。

植木鉢の白米。

ゆっくり、ずずつ、と、

一口分だけ、削げ落ちるように、

消える。

終